

令和2年7月7日 第64号

柳川郷土研究会
季刊誌

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火 だれの世話に

ある老人の葬儀があった。一カ月ほど病んで亡くなった。葬式を出したのは故人の姪だ。埋た。一人息子は、焼香に来ただけだった。父子の間でどんなことがあったのかは知らないけれども、非情な息子よ、と噂されて帰ってゆく息子にも、それなりのわけがある。老人もそうだが、親戚に白い眼で見られて帰ってゆく息子もまたあわれであった。

病床にあった故人は、お前さんの世話になろうとは夢にも思っていなかった。いまとなつては何もあげるものもないし……。といいとおして亡くなったという。姪の夫は他人である。余程、心の豊かな人でなければできないものではない。

お前の世話になぞなるものか、と口に出しているうばかりでなく、そういう心で遇する人がある。しかし、世は無常である。これはと思う人に背かれることも少なくない。そうして、この老人のように子にも見捨てられ、思いもしなかった人の世話をうけることだつてある。

だれしも、人の世話になりたくない、と願っているが、老・病・死は必ずやってくる。いつどこで、どんな人の世話になるかも知れない。

だれに対しても「この人の世話になるかも」と思う心をいつも持ち続けて、日々を送りたいものだ。

一般的考え方(武末十治男)
何時の日々でも、自分の我を張らずに前文のよいうな気持ちを持って人々との付き合いを大切にしておきたいものです。